

第69回 小中高校生の吃音のつどい(演劇で遊ぼう!)

11月22日(日)小学生13人、中学生2人、高校生6人、ご両親19人、スタッフ39人の計79名が参加。

中野区立^{とうが}桃花小学校きこえとことばの教室にて開催。

今回、5年振りにスタッフとして関わるということで最初は不安の方が大きかったです。が、初顔合わせの時に皆さんが気さくに声を掛けてくれたおかげで緊張することなくつどいに戻ることができました。初対面の人に話しかけるって勇気があることで私は未だに苦手で躊躇してしまいます。なので、素直に「これは見習わない」と思いました。つどいにおいても子供達がスタッフに甘えたり飛びついたりする姿をよく見ました。つどい全体が明るく良い雰囲気が作られていると感じています。皆さんから教わるが多く改めてつどいに戻って良かったです。だからこそ皆さんにおんぶにだっこの状態で申し訳なく思っています。小学生グループのリーダーを担当しましたが、他のスタッフの方の対応力に救われた形です。十分な打ち合わせができていなかったにも係わらず、意図を理解し対応してくれたおかげで無事に話し合いを終わらせることができました。ただ、やはりそれで満足してはいけないんですよね。求めるべきは及第点ではなく満点+α！それぐらいの意気込みで準備をして子供達に満足して帰ってもらいたいです。参加者とスタッフの感想を紹介します。

(リーダー江口佑樹、川端^{すずえ}鈴笑、榊原慶二)

K. N 君(高1)

全て吃音のせいだと思っていた。友人とうまくいかない事も、自分から声をかけられないことも、部活をやめたことも…。何もかも、俺は吃音のせいにして現実から逃げてきた。

そんな時に見つけたのが「吃音のつどい」だった。行ってみたら何か変わるかもと思い、思い切っで参加してみた。最初は意味が分からず、「早く帰りたい…」と思ったが、自分と同じ境遇の方達とコミュニケーションをとったり、意見を交換したりしながら、「自分だけじゃない、吃音でも前向きに生きている人達がいるのに、自分だけ下を向いていてどうする。つまりながら話す事よりも、今の俺の方がよっぽど恥ずかしくてかっこ悪いじゃないか」そう思えました。

その日をきっかけに、自分は吃音に対して、前向きに考えることができました。学校での口数が増えて、学校生活を楽しく過ごしています。

松本 ^{なおひろ}直大(高校生 G スタッフ)

K君はつどいの前半「帰りたい…」と思っているのが分かるくらい表情が暗くて少し心配になりましたが、徐々に明るくなってつどいが終わった後にはこんなにうれしい感想を書いてくださいました。感想に書いてくれたことを思い続けられればきっと大丈夫、また3月に会いましょう。

埼玉県ことばの教室 担当

私は、埼玉県で難聴・言語通級指導教室を担当しており、構音・難聴・吃音の子供達と一緒に学習をしています。中でも、吃音の子供達の支援には自信が無いというか、手こずっているというか…どんな支援をすればいいのか今イチ分からず、何となく時間を過ごして帰ってもらっている日々が続いていました。いろいろな研修会やワークショップに参加して学んではいるのですが、いろいろな路線があり、これだ！というものには出会わずにいました。

「つどい」の存在は、佐藤隆治さんを知ると同

時くらいに知ってはいたのですが、吃音の親子が参加する所で私には関係無い所だと思っていましたから、一度も参加したことはありませんでした。

私は、ひと組の吃音の親子に苦手意識を持ってしまい、その子が通級してくるその日その時間が憂鬱でたまりませんでした。佐藤さんにも相談しましたし、伊藤伸二先生(JSP)にも相談しました。お二人とも、「つどいに来たらいいのに・・・」とか「吃音キャンプに参加すればいいのに・・・」と言っておられました。(そうよ、そこでいろいろな人の話を聞いて来れば考え方も変わるわよ!)と、自分ではなく相手を変えようと思って必死でした。6年生だし中学校には通級は無いから今のうちに何とかしなければ・・・と。

しかし、夏休みに佐藤さんを招いての親子学習会(今回は2回目)を終えた2学期当たりから、少しずつ私達の溝が埋まってきたというか距離が縮んできたというか、言動に変化が表れてきたのです。そして、私の気持ちにも変化が表れました。(今度のつどいには参加してみようかな。今後、中学生になっていく吃音の子供達につどいの存在を知らせるのに、自分が見聞きしておかなければと)。

でも、演劇のワークショップでしたので、気乗りはしませんでした。それは、人前で何かを表現するのは、私の中で一番苦手なことだからです。そこで、同じ学校の担当者を誘って参加することにしました。(今回は初めての参加だから、見せてもらうだけにしようね)なんて言いながら・・・。当日は3人共誰よりも張り切っていたかもしれません・・・。

勇気を出して参加してみて、本当に良かったです。何よりも良かったのは、いろいろな方とのネットワークが広がったことです。また、演劇のワークショップは自分の通級のグループ学習でも取り入れることができると、思えたことも良かったです。この「つどい」には【不思議なチカラ】があるような気がします。みんなが素直になれるというか、素の自分になれるというか、自然に自己開示できるような、不思議なチカラが。次回も参加してみようかな、と今は思っています。

すずき ことた (演劇講師, 演劇デザインギルド)

「つどいスタッフのみなさんへ」

10/25、日曜、つどいスタッフ向けの事前の講習(という名のワークショップ)を行いました。この時集ってくれたのは、高校生から社会人まで20名ほど。私はこのつどいで活動は初めてだったのでドキドキしながら会場に向いました。本番に向けての事前練習と言いつつも、正直なところ「もう一つの本番」と思っていたからです。

身体や声を使いながら、遊んだり考えたりして、最後には「**りゆうがあります**」という絵本(ヨシタケシンスケ作、PHP 研究所)を題材に、自分達で「**どもるにはりゆうがあります**」という短い劇をつくりました。そして最後に私は「進行役である私の方が勇気づけられた気がします」とコメントをしましたが、そのことについて少し書きたいと思います。

私は、普段、いろいろな所で演劇活動をしています。お話したかもしれませんが、それは舞台の上でライトを当てて衣装も派手な演劇であることは少なく、自分のことや、自分の仲間のこと、実際に聞いた話をもとにしてつくる小さな演劇の方が多いです。そんな中で、私は社会的に立場の弱い人達と一緒に演劇活動をすることも少なくありません。日本に住む外国の人、日本人だけど外国にルーツを持つ人、車イスに乗っている人、学校や会社でハラスメントを受けている人、家庭で暴力を受けている人…。例を挙げていくとキリが無い感じです。そういう人達と**演劇をつくりながら、その人達がどんなことを考えているのか、どんな風になりたいのか、どんな風になって欲しいのか、などを考えています**。そのような演劇活動をしていると、その体験にシンパシーを感じ、辛く感じてしまうこともあります。

吃音の人達との演劇活動も「大丈夫かな」「辛いことを考えすぎたりしないかな」「考えていて、嫌になったりしないかな」「自虐的にならないかな」など、様々なことを考えながら、プランを練り、臨みました。

そして、最後の発表。最後の発表を見た時、「どもる」ことを肯定的に捉えている演劇が出てきて、私はとても勇気を貰ったように思ったのです。「ども

ることをなかったことにする」「どもりが治って良い生活になる」のではなく、どもりを「うらやましい」って思う人が出てきた演劇って、なんて素晴らしいんだろう、と私は思ったのです。

私が他の場所で多く出会う演劇は、「自分が強くなること」に焦点を当てている事が多いのです。つまり、いじめやハラスメントを受けて、「嫌だ」「やめて下さい」と言えない人達に、どうやったら言えるようになるのか、または、他の人が助けたりしてどうやってハラスメントが無くなるか、という様な演劇が多いのです。でも、それは当たり前なのです。そこを変えないと、そこを乗り越えないと、彼らにとって望む場所が無いのですから。

以前、水俣で、私の仲間が胎児性の障害を持った人達と演劇をつくる話になった時に「悲しい話にしないと、人は見に来ない。人の心には響かない」と言われたそうです。でも障害を持つ人だってお腹は空くし、怒ることもあるし、恋もするし、やきもちも焼きます。そういうことを演劇にしたのを見ましたが、とても面白いものでした。それが生きてるって事だっと思ったのです。

吃音の人達が「**吃音を無くさない**」「**吃音を治ったことにしない**」で、そこに、地に足を着けて演劇をつくっているのを見て、私はとても勇気を貰ったのです。そうだ！私は、こういう演劇を見たいんだ！って。

長くなりましたが、「勇気づけられた」というのは、そういう事です。

「つどいのみなさんへ」

11/22はとても楽しかったです。ありがとうございます。

つどいのみなさんは、年に数回会っていると思いますが、私は初めてみなさんとお会いするので、実はとてもドキドキしていました。でも、楽しそうな笑顔に出会えて、とても良かったです。

本当は「どもる」ことを演劇にするって、嫌じゃないかな、そんなこといつも思ってるからわざわざ演劇になんかしたくないんじゃないかな、って思っていました。「難しいかもしれない」ってスタッフの人にも言ったことがありますし、自分でも何度も何度も、どうしようか考えました。

でも、みんなが正面から取り組んでいる姿を観て、やって良かったなあ、って思いました。

私は普段からいろんな所で、いろんな人達と演劇をつくっています。その時に一つだけ注意していることがあります。それは「なるべくウソをつかないこと」です。

子供だって大人だって、あんまり人に言いたくないこと、知られたくないことの1つや2つはあります。それは仕方がないです。というよりも、全部正直であるって無理だし、とても難しいことです。「空を飛べるんだ」とか「魔法を使えるんだ」のような大きなウソじゃなくても、「宿題やった」くらいの小さなウソ、または「100m泳げるよ(本当は25mしか泳いだことがない)」というような見えを張るようなこともあるでしょう。でも、そのウソをなるべくつかないようにしています。

私は「演劇をつくる」仕事をする前、ウソばかりついていました。他の人達が学校を卒業して、会社に就職して、お金を稼いでいるのに、私はアルバイトしながら演劇を続けていました。今で言うフリーターですね。そのことが恥ずかしくて、後ろめたくて、自分を「ろくでなし」と思いたくなくて、人にも、そして自分にもウソをつけていました。本当はアルバイトでお金を稼いでいて辛いのに、「好きなことがやれるって素晴らしい！」って嘘ついてました。

でも、いろんな人と出会って、いろんな人と演劇をつくっていくうちに、ウソをつくのが辛くなってきました。そしてある時から「**こーたはこーたなんだ。ウソをつくのはやめよう。他の人がどうだっていいじゃないか**」と思って活動することにしました。

だからといって凄くお金が稼げたとか、そういうことはありません。でも、気持ちがすっごく軽くなりました。そうしたら、人の気持ちも分かるようになってきて、そしてまた、気分が良くなってきたのです。

今でも失敗することはたくさんあります。でも、失敗したことを隠そうとすると、さらに失敗することが多いです。「失敗しちゃった」と素直に言って、その後どうするか、自分で考えたり、そこにいる人と一緒に考えたりします。失敗したり、壊しちゃったり、上手いかわからないことはたくさんあるけど、それを隠さず、ウソをつかないでいることで、良い方向に進んでいくことが多いのです。そして、それが自分の力

になっているように思います。

だからって「どもりを気にするな」なんて言えないです。辛いことも多いと思うから。でも、仲間がたくさんいること、ウソをつかなくて良い場所があることを忘れずにいてくれると嬉しいな、と思います。また、機会があったら一緒に演劇つくりたいですね！

篠原 久美子（演劇講師、劇作家）

「ワークショップの始まる前と終わった後に」

演劇教育に携わっていた関係で、今回初めて、つどいの『演劇で遊ぼう！』に協力させていただきました。ワークショップの前後で気付いたことや学ばせていただいたこと、考えたことなどについて書こうと思います。

最初に学ばせていただいたことは打ち合わせの時に気付いたことでした。吃音の方と話をすると、私はいつもよりも少しだけ、「人の話をていねいに聞く自分」になっていることに気づきました。このことは私にとって感謝すべきことでした。というのも、私はどちらかといえば話す方が聞くことよりも多く、聞くことにおける反省が多いからです。演劇は「聞くこと」が最も大事だと言われています。言葉というものはたいてい「私の気持ちあなたに届け」できていますが、たいていの演劇初心者は「私の気持ち」の練習ばかりして、本当に大切な「あなたに届け」がどこかに行ってしまうがちです。コミュニケーションもそうで、「私の気持ち・意見」を言う訓練は多いのに、「この気持ちや意見は誰に届けたいんだろう・誰の気持ちを動かすための言葉だろう」と考えたり、「あなたに届いている？」と気遣ったり、「受け取りたいと思っているよ」ということが伝わる聞き方の訓練の、なんと世の中に少ないことでしょう。

そのもつとも演劇的でもあり、コミュニケーションの基本でもある「届いていますか？」と「届いているよ(受け取りたいと思っているよ)」のやりとりが、吃音の方との会話では自然に「ていねい」になるのです。これは発見でした。吃音に関する知識は全く素人の私ですが、演劇、特にことばを使ったコミュニケーションの専門である劇作家の目から見ると、

ことばを発する側の「伝えたい気持ち」や「相手に届いているかどうかの気遣い」が、吃音の方々は非常に高いと感じました。そのコミュニケーション力の高さが、私の受け取るスキルを上げて下さったと思えました。だとすれば、コミュニケーション・スキルが低いのはむしろ受け手の側ではないか、学校は、ドラマ教育の基本(コミュニケーションの基本でもある)「他者を受け入れながら聞く訓練」が足りていないのではないかと考えさせられました。

私は小学校の演劇教育に8年間関わりましたが、その中で先生方にこう言われました。「私達は演劇を授業で取り入れたら子供達の表現力が伸びるものと思っていました。けれども**実際に子供達が伸びたのは、人の話を聞く力、友達を尊敬する力、自分を好きになる力**でした」。そう考えますと、あの打ち合わせの短い時間で私の聞く能力をレベルアップさせてくださった吃音のスタッフの方々との会話は、実に演劇的に豊かな時間だったと思えました。

また、ワークショップ後、午後の保護者やご家族の方々とのディスカッションに参加させていただいたことも、私自身の子供の頃のことを思い出して検証する良い機会になりました。

吃音が原因でお子さんが苛められる、お子さん達が「自分はダメなのだ」と自信を無くす、「自分は人に迷惑をかけている」と自己肯定感が持てない、「いつか自分は吃音が治ってアヒルが白鳥になるように別人になる」と信じていることが心配といった胸の痛くなる悩みを伺い、また、「自分を受け入れて欲しい」、「何とか自分に自信を持って欲しい」、「苛められたら言い返せるくらい強くなって欲しい」といった切実な願いなども伺いました。

そうした保護者の方々の言葉は、私に小学生の頃に集団いじめにあったことを思い出させました。吃音ではなくても人は様々な理由でいじめにあうことがあります。やり返すこともできず、泣いてしゃがみこみ、弱い自分を嫌い、自分はダメな人間だ、何をやってもダメだ、自分なんかいない方がいい、もっと強くて明るくてみんなから好かれる別になりたい、頑張ればいつかなれると思っていたのは、子供時代の私自身でした。そしてこの「私はダメだ、私なんかいない方がいい」という感覚はその

後も長く人生の中で何度も沈んでは浮かび上がり続けました。それでも私が今、様々な活動をしなが
ら、自分を嫌うことなく、傍から見ると行動的と言わ
れるように生きられるようになったのは、おそらく、**私が弱かったから**だと思います。

逆説的に聞こえるかもしれませんが、私は過去、
何度も、強くなろうとして失敗してきました。強くて
物事に動じない自分になろうとすると、自分の弱く
柔らかい部分に蓋をしまい、他者の声が入りに
く頑なになってしまったり、自分を敢えて鈍感にさ
せてしまったことで人を傷つけてしまったと後から
死ぬほど後悔したり、もっと自分を嫌いになってし
まうことがありました。反対に、子供の頃から弱虫で
泣き虫ですぐに動揺する私のままだったからこそ
できたことがありました。世界や日本の様々な紛争
被害や災害による被災などを見るとすぐに動揺し
てしまい、いても立ってもいられなくなってしまい、
だからこそできた支援活動がありました。弱虫で泣
き虫のままだったから、現地の人達と一緒に泣い
てしまい、だからこそお伺いすることのできた貴重
なお話がありました。子供の頃に憧れた「何があつ
ても動じない強い人間」にならなくて良かった、人
の痛みにすぐに動揺しておろおろ泣くし、すぐに
動じるダメな私だからこそ、たくさんの人に助けて
いただきながらできたことがあった、そう考えるこ
とができるようになった時、人はどんなに弱くても自
分に自信がなくて自分を嫌いであってさえも、人を
好きである限り大丈夫なのじゃないかと、そう思え
てきました。するといつの間にか**ふつと、強さと弱さ
が逆転する瞬間を迎えます**。自分のために自分を
強くすることの弱さや、他者のために自分を弱くす
ることの強さが見えてくるようになりました。

私には、吃音の方の悩みや苦しみを分かること
はできませんし、その保護者やご家族の方々のご
心配やお気持ちが分かるなどは到底申し上げら
れません。それでも、私自身の体験した苛められる
悩みや苦しみ、自分に自信が持たなくて、自分が
嫌いで、もっと違う自分になりたいと思いつける辛
さの経験を共有させていただくことで、私自身も体
験を整理することができましたし、ここでは書くこと
はできませんでしたが、保護者やご家族の方々の
具体的な体験や悩みも共有させていただくことが

できました。

だから、その昔の自分自身に言えるとしたら、こ
ういうことばでしょうか。

「自分が嫌いなら今はそのままでもいいよ。この世
の中には自分が嫌いって言うくらいの人じゃないと
できない仕事もあるよ。危ない所に行って困ってい
る人を助けるとか、自分が大好きな人にはできない
よね。だからいいんだよ、自分が嫌いでも、人が好
きななら。好きな友達や家族の人や、一人でも人を
好きになれる人は大丈夫だから。それとね、「自分
はなんてダメなんだ」と思っている時は、自分のこと
だけ考えている時だよ。「どうやったらうまくいけ
よう」と考えている時は皆のことを考えている時」こ
んなことばをもしも、子供だった私に言ってくれる
大人がいたら、私は生きることがもう少しだけ楽に
なっていたかもしれません。

K・Kさん(小5男子のお母さん)

1年振りに参加しました。「とにかく一度は行って
みよう。それで嫌だったら、次からはいいから」と言
ったのをしっかり覚えていて、他の調理などの企画
には参加しただけでなかった息子。演劇が楽しかっ
たようで、今回はあっけなく参加することになりました。

猛獣狩りなど母と離れても、最初から笑顔でみ
んなに混ざって楽しんでいる様子。グループごとの
即興劇の発表まで自然な流れで持ってくる企画に、
私は感心しきりでした。次男はどうするのだろう
…？と自分のグループのことより(申し訳ありませ
ん!)次男のグループが気になってしかたありませ
ん。

即興劇のお題は「**吃音の理由**」をばかばかしく
てもいいから創作するというもの。各グループが
ユニークな理由を考え、吃音のある自分を肯定的
に受け止めるようなストーリーに仕立て、和気あい
あいと演じていました。次男のグループは、子供は
二人で、学生さんらしい青年達が多い編成でした。
話し合いの時から次男がずっと笑顔でなにやら話
していて、本番でも主演。「ニュースキャスターに将
来なりたいけれど、吃音のせいで無理、と周りから
言われている男子が、大人になった時に晴れて憧

れのニュースキャスターになり、テレビに出てもらう
ずにニュースを堂々と読み上げている」という設定
でした。

お昼休みに聞くと、「ストーリーは自分で考えた。
みんな(青年達)がそれで良いと言ってくれて、演
ってみて楽しかった」と得意そうでした。「吃音が治
って、普通に話せるようになりたい」という本心を素
直に出して子供らしい、それもまたありのままの姿
を出せた次男は、帰ってから上機嫌でした。昨夜、
つどいの感想を改めて聞くと、「演劇が楽しか
った。でも、僕もみんなもできるだけもらえないよ
うに話していた。去年のつどいと違った」と言って
いました。

本人なりに、周りの人達を見て、いろいろなこと
を感じているのだと思いました。来年は6年生にな
ります。思春期の入口で母親と出かけるのは、どん
どん減っています。来年の演劇のつどいをどのよう
に迎えるのでしょうか。楽しみでもあり、心配もして
います。

つどいから1か月経って、再び聞いてみました。
「大人になっても治らないかもしれないって知って
いる?」「そんなこと、知っているよ。でも、どもっ
ている大人は、この間はいなかったじゃん。みんな、
僕が考えたストーリーで、いいじゃん! って賛成し
ていたよ」そんなやりとりをしました。最近では、あま
りもらわずに話す次男。「どもっいてもいいんだよ
」と思うようになるには、まだ時間がかかるかもしれ
ません。

M.Tさん(高2 R君のお母さん)

「演劇レッスン」では、短時間で考え、表現する
という初めての体験でした。若い人の想像力に驚い
てばかりでした。

つどいに初めて参加した時、「生まれる前からず
っと知っていた人達の様だ」と言った息子の言葉
が印象に残っています。

今回会場になった中野区立桃花小学校「きこえ
とことばの教室」に通っていた時、卒業しても吃音
の事を話せる場所として「つどい」を紹介されました。
とっても感謝しています。

体験談 原空留未(スタッフ)「私と吃音」

私が「吃音」という存在を認め、一生付き合っ
ていこうと思ったのは中学2年生の頃です。「吃音」
が「治るものではない」ということ知り、そして吃音と
共に生きている沢山の友達と出会えた頃。それは、
もしかしたら少しの諦めもあったかもしれませんが、
「どもり」を認め、受け入れ、私が一つ大人になった
瞬間です。

私は幼い頃、自分がどもっていることにあまり気
づいていませんでした。一緒に住んでいる家族は
勿論心配していましたが、「そんなに変なことなの
かな。ちょっと話す時に息が苦しいけど、そこまで
困ってないし」なんていう風に、特別気にはしてい
なかつたのです。

しかし小学校に上がり、周り「違う」ということ
を実感しました。それは私だけでなく、クラスの友達も
みんなです。私が声を掛けても、「どうしてそんなし
ゃべり方なの?」と聞かれ、音読の時には笑いが
起きる。真似をされることもありました。一度気にな
りだしたことは、もう知らないふりなんてできません。
小学校に入学し一年を過ごす頃には、人前で話
すのも嫌いになっていたのです。

友達と話す時は、生まれつきだから気にしない
で!と言っていました。今思うと、私の周りの友達
は意外と受け入れてくれていたように思います。し
かし「気にしないで」と言った当の本人がその当時、
誰よりも気にしていたのです。

中学生の頃、どんどん自分に自信が無くなり、
学校や塾が終わって家に帰ると「今日音読でつ
かえた。塾でどもりを真似された」などと母に愚痴を
こぼす日々を送っていました。そんな私に対して母
は「あなたは正しい、真似する方が間違ってるの
よ」と救われる言葉を沢山かけてくれました。つい
最近知ったのですが、その頃彼女なりに吃音につ
いて沢山勉強してくれていたようです。そして母は、
ふさぎ込む私を、言語聴覚士の先生のところへ連
れて行ってくれました。

言語聴覚士の先生とは本当に沢山の事をお話
しました。日々の学校生活、家族との時間、私の趣
味、そして吃音。先生は「どんな時にもどもっ
ちゃう?」「電話と対面だったらどっちが楽?」「吃音を

どうしたい？」など、**吃音について考えさせられる質問をしてくださり、自分自身と向き合う時間を作ってくださいました。**私は何よりどもっている自分と、ずっとお話してくれること、好きな話をずっと聞いてくれることが嬉しく、先生と会う時間は本当に楽しかったです。

そして先生は「小中高校生の吃音のつどい」を紹介してくれました。吃音を持つ人達が集い、レクリエーションをしたり悩みを共有したりする会です。私は、初めどのような集まりなのか想像がつかず不安な気持ちで参加しました。しかし、すぐに、そこが活気にあふれ、参加者もスタッフも前向きに活動をしている場だということが分かったのです。社会人や大学生など、吃音と共に生きている大人達がアドバイスをくれ、私の世界は広がりました。そして私にとって「つどい」は「吃音」というものを認め生きていくことの大切さを実感できた大切な場所になったのです。

今、大学生になった私は、教員になるべく日々勉学に励んでいます。吃音の人がなぜ教員に？と思われる方もいるかもしれません。正直、話すことに対してはまだまだ不安が大きいです。しかし、**社会は意外と吃音を持つ人を受け入れてくれることをこの20年間で学びました。**カミングアウトをしまえば、他人というのは思っていた以上に気にしないものです。あとは自分の気持ちだけではないでしょうか。もちろん、どもらなかつたらどんなにいいか……と考えたことはありますが、吃音で良かったことも意外とあるものです。

私にとって、良かったと思えた一番の理由は、人にやさしくなれることです。「普通の人ができる」ことができない、という事実と付き合っていると、他人が何かしらできなかつた時、それを責めることはありません。もちろん笑うことも怒ることもないのです。人間誰しも出来ること出来ないことがそれぞれ違うのですから。このことを小さい時から実感しているということは、これから生きていく上で必ず「強み」になると私は信じています。

皆さんも、どもってしまって辛かったこと、今まで沢山あると思います。自分の事が嫌になってしまうことも、もしかしたらあつたかもしれません。その辛さは私にもよく分かります。けれど、その経験は絶

対に無駄にはなりません。そしてそれを感じたことのある皆さんだからこそ、これからは、そんな自分とどう付き合っていくべきか、少しずつ考えてみて欲しいなと思います。そして将来、皆さんが自分の「どもり」を受け入れ、自分の事が大好きな人間になってくれますように。

収支報告&後記

当日参加費 (58家族×600円、スタッフも1家族と扱う)	¥34,800	
スタッフ向け事前レッスン(10月25日)のスタッフ参加費 (17人×500円)	¥8,500	
案内状発送費		¥16,950
当日の講師謝礼		¥25,000
当日のお茶代・紙コップ代等		¥1,664
参加者に郵送する写真代(前回までのつどいの分)		¥1,920
当日の話し合い・スタッフ勉強会に関する諸費用		¥2,821
スタッフ向け事前レッスン(10月25日)の講師謝礼		¥15,000
合計	¥43,300	¥63,355
収支(当赤字はこれまでの収入から補てん)		¥-20,055

◆「どもることは、ちっとも恥ずかしくない」というのは、私佐藤においてもウソ。しかし、どもってますが、フツーに仕事をし、フツーに自分らしい人生を送れていると感じる…というのは、何もウソではない。そして、そんな私はスーパースターでもなんでもない。

✦「**りゆうがあります**」という絵本(ヨシタケシンスケ作)を題材に、自分達で「**どもるにはりゆうがあります**」の演劇創作、楽しかったですね！こんなにゆうもあるのか！？こんな見方もできるのか！？演劇で皆で楽しめました。隠さなくちゃ、直さなくちゃ、改善しなくちゃでは…先が続きません。どもることの付き合い方を、からだで考える機会でした。
(代表 佐藤 隆治)